

共同研究 ● ストリート・ウィズダムとローカリティの創出に関する人類学的研究 (2011-2014)

本共同研究が探求する「ローカリティの創出」とはどのようなものだろうか。本稿では研究代表者の関根康正（関西学院大学）の唱える「ヘテロトピア・デザイン」というローカリティの創出のあり方に注目し、ストリートの人類学の「第2ラウンド」（関根 2012）にあたる本共同研究が現在取り組んでいる課題の一端を示したい。

差異を穿つ：〈都市的なるもの〉とヘテロトピア

「ヘテロトピア」とは何だろうか。関根がヘテロトピアについて最初に言及したのは論集『〈都市的なるもの〉の現在』においてであった（関根 2004a；2004b）。この論集で関根は、差異が明瞭でなくなりつつある現代世界において、どのように差異を穿つかという問題意識の下で、差異性や他者性が出現する場所としてのヘテロトピアに注目した。

そもそもヘテロトピアとはミッシェル・フーコーがユートピアと区別して導入した概念である（フーコー 2002；2013）。実現されていない自己の鏡の中のイメージであるユートピアに対し、ヘテロトピアとはそのような鏡の向こうに映る像ではなく、ユートピアとは鏡を挟んだ（この世における）対照物である。ユートピアが世界に位置をもたないのに対し、ヘテロトピアはこの世に位置をもちながらにして、あらゆる場所の外部を具現する。墓地、庭園、図書館、美術館、定期市、モーター、売春宿、監獄、植民地、船などがフーコーによってヘテロトピアの例として挙げられている。ヘテロトピアが境界的な場所として働くことによって私たちは異他的なるものと出会うことが可能となる。

関根はこのフーコーのヘテロトピア概念を2つの局面へと接続する。第1の局面は1970年代に展開されたアンリ・ルフェーブルの都市論を援用した〈都市的なるもの〉をめぐる議論である。関根はルフェーブルが工業化と都市化を区別し、工業化の帰結としての「工業都市」の先に、まだ十分には姿を現してはいない「都市社会」（工業化とは区別される都市化を全うした社会）を構想したことに注目する。〈都市的なるもの〉とは、このいまだ実現していない「都市社会」の実現へと差し向けられた都市化の動きそのものである。ルフェーブルはそれを〈生きられたもの〉あるいは、「生活世界」と呼び、工業都市のイゾトピー（同域）に対してヘテロトピー（異域）として位置づけた。

関根はルフェーブルの議論に学びつつ、現代都市の不安を、外部性の喪失、差異のなさ、都市の〈都市的なるもの〉の喪失として捉え、人類学的に都市を描くことを「同質化作用を発揮する権力システムの縁辺という境界で人がいかにその内外を出入りしながら生き抜いているのかを具体的に記述すること」（関根 2004a：12）として位置づけなおす。〈都市的なるもの〉の追求、すなわちヘテロトピアの復権がここでの課題となる。

しかし、冷戦構造の崩壊した1990年代以降この状況は変

化する。関根は1990年代以降、資本、労働力、情報が「集積」する都市から「流動」する都市へと変化する「都市のフロア化」がおこったことに注目し、「絶対的なここ」を剥奪する流動性と「絶対的なここ」を目指す場所性との関係性をめぐって、マルク・オジェの「非-場」と「場」の議論を援用する（関根 2004b：477）。オジェは近代化が過剰となるスーパーモダニティにおいて、インターチェンジや空港のような、個と個が孤立したまま交通する非-場が露出してくるといい、非-場とフーコーのヘテロトピアの近接性を説く。関根はここに他者性や差異に開かれた非-場においていかに場を紡ぎだすかという〈都市的なるもの〉の第2の局面をみる。非-場を介して場を求める「非-場の場」の構築こそが第2の局面での課題である。

『ストリートの人類学』：ドゥルーズ的転回

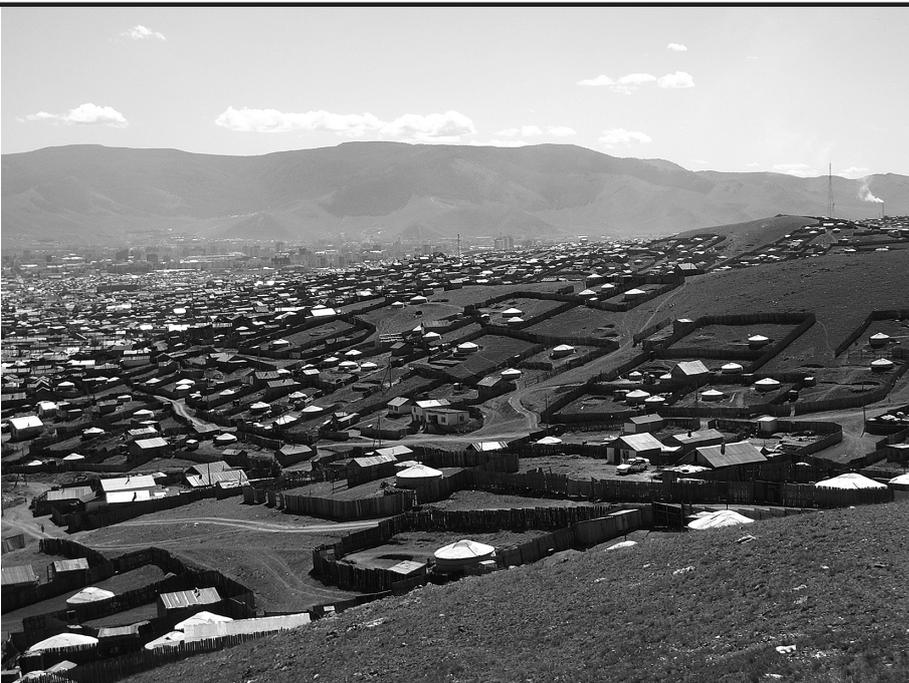
ストリートの人類学は以上のような〈都市的なるもの〉の第2の局面の延長線上に展開される。第1の局面が問題として消失したわけではないものの、第2の局面が思考の最前線に位置づけられることになる。第1の局面が「ストリートへ！」というスローガンによってまとめられるとするならば、第2の局面は「ストリートから」の思考である。

関根はここで、「差異を穿つ」という課題をより明確に掘り下げようとする。その際、差異に「デリダ的差異」と「ドゥルーズ的差異」という区別が導入されることが注目される（関根 2009）。2つの差異を幾分図式的にまとめてみると以下のようなようになる。

生と死、この世とあの世、われわれと他者として現れるような差異を例に考えてみよう。生にとっての死、この世にとってのあの世、われわれにとっての他者が絶対的な否定性、あるいはわれわれに到達不可能な外部として設定され、そのような外部を経由してはじめてわれわれの生きる内部が成立するような時、関根は両者の差異をデリダ的差異と呼ぶ。

たとえば、主流社会をホームとする住人と、そのような社会空間の縁辺（ストリート）に生きる他者（ホームレス等）とを対置した場合、ホームはそれのみで自律的に存在するのではなくストリートとの差異において成立する。ホームは常に外の介入にさらされているが、ホーム住人はそのことに必ずしも自覚的であるわけではない。ホームの住人は偶然の他者との出会いによって自己の在り方を転換する。このような差異がデリダ的差異である。

それに対して、生と死、自己と他者を貫通するような、より大きな「滔々たる生の流れ」における差異を関根はドゥルーズ的差異と呼ぶ。ここでは死や他者やストリートが外部として特権化されることはない（関根 2009：544-546）。「滔々たる生の流れ」としてのストリートにおいては生と死、自己と他者、ホーム住人とホームレスとは連続的であり、そこには相対的な差異しかない。



モンゴル国の首都ウランバートル市周縁部の「ゲル地区」と呼ばれる区域。都市計画の縁辺に配備されたホームとストリートの区分は可变的、流動的である（2005年）。

デリダ的差異がホームの側から「ストリートへ!」という志向性をもつものに対し、ドゥルーズ的差異はストリートの側から、ストリートにおいて横溢する差異をつかみ取ろうとする。『〈都市的なるもの〉の現在』においては、いわば「ストリートへ!」と「ストリートから」の往還が問題となっていたのに対し、ここでは「ストリートから」の思考が前面化する。

ヘテロトピア・デザイン：ストリートの人類学の第2ラウンドへ

以上のような「ドゥルーズ的転回」（関根 2009：548）をふまえたうえで、本共同研究において関根はローカリティの創出をヘテロトピア・デザインとして捉えなおそうとしている。

ローカリティがいかにか創出されるかを考える時、アルジュン・アパデュライによるローカリティと近傍（neighborhood）との区別は示唆的である（Appadurai 1996）。アパデュライによればローカリティとは①社会的直接性の感覚、②相互行為のテクノロジー、③コンテキストの相対性の間のつながりの系列によって構成される「現象学的な質」である。それに対して近傍とは、そのようなローカリティが1つの次元ないし価値として生産される「場」としての実際の社会的形式、状況づけられた共同体ないし生活世界であり、自らの社会的再生産へ向かう現実性（actuality）と潜在的可能性（potential）とを特徴とする。

近傍の生産、再生産のみによってローカリティが生産されるわけではなく、特定の「現象学的な質」がこの近傍に宿る時、その「質」が主体（主語）ないしカテゴリーとしてのローカリティの述語となり、ローカリティは生産される（Appadurai 1996: 178-179）。たとえば、人類学がこれまで通過儀礼と呼んできたような多くの儀式はローカリティの身体への刻印（inscription）のための社会的技術であるとみなすことができるとアパデュライは言う（Appadurai 1996: 179）。通過儀礼によって、親族など状況づけられた共同体（近傍）に所属する行為者がローカルな主体として生産される。

ここでのアパデュライの議論のポイントは、ローカリティ

の生産に際して、近傍がローカルな主体の生産を可能とするためのコンテキストとして働くだけでなく、そもそもローカルな主体の生産の前提となるべき近傍の生産においても、先行する別の近傍がコンテキストとして働くという点である。近傍が近傍であるためにはすでに生産された別の近傍から引き出されなければならない。多くの場合、森林や未開地、海洋や砂漠、湿地や河川など生態学的な記号によって標される境界が、生態学的で社会的かつ宇宙論的な地勢とみなされ、近傍の生産のコンテキストとして働く（Appadurai 1996: 182-183）。そこでは近傍とローカリティという非対称な関係ではなく、近傍と近傍の連鎖そのものが問題となる。

アパデュライは近傍とローカリティの相互構成を、歴史的かつ弁証法的な関係として捉えている。しかし、ドゥルーズ的転回を経由したストリートの人類学にとって、ローカリティの創出の探求は、「反弁証法的思考」（関

根 2009：546）へと、つまり近傍の生産の連鎖を差異化の運動として捉えるような方向へと深化している。ここで近傍のもつ潜在的可能性をいかに現実化するかが新たに問題となる。近傍の連鎖の内部におけるローカリティの創出は、近傍の生産からローカルな主体の生産への弁証法的な回帰でもなければ、滔々たる生の流れにおいて場が非-場の連鎖へと溶解していくことでもないはずである。

関根はこのような自己と他者との「新たな共同性の場（ローカリティ）」の「創発」の事例、ヘテロトピア・デザインの宝庫として、私たちの記憶する「フォークロア」のもつ潜在的可能性の探求を呼びかける（関根 2012：22-23）。ストリートの人類学の第2ラウンドは現在この問題に正面から取り組もうとしている。

【参考文献】

- Appadurai, Arjun 1996. *Modernity at Large: Cultural Dimensions of Globalization*. University of Minnesota Press.
- 関根康正 2004a 「序論〈都市的なるもの〉を問う人類学的視角」『〈都市的なるもの〉の現在—文化人類学的考察』関根康正編 pp.1-39 東京大学出版会。
- 2004b 「都市のヘテロトピア—南インド・チェンナイ（マドラス）市の歩道空間から」関根康正編 pp.472-512 東京大学出版会。
- 2009 「総括『ストリートの人類学』という批評的エスノグラフィの実践と理論」関根康正編『ストリートの人類学』下巻（国立民族学博物館調査報告 81）pp. 519-560 国立民族学博物館。
- 2012 「ストリート人類学の第2ラウンド」『民博通信』136: 22-23。
- フーコー, M. 2002 「他者の場所—混在郷について」小林康夫他編『ミシェル・フーコー思考集成 X 1984-88 倫理／道徳／啓蒙』pp. 276-288 筑摩書房。
- 2013 「ヘテロトピア」佐藤嘉幸訳『ユートピアの身体／ヘテロトピア』pp. 33-53 水声社。

にしぎきゆう

関西大学非常勤講師。専門はポスト社会主義の都市と都市化の人類学的研究。論文に「ポスト社会主義のストリート—モンゴル・ウランバートル市における都市空間の再編」『ストリートの人類学』下巻（国立民族学博物館 2009年）などがある。